

生命

幼児の餓死の震撼

平成二十二年七月三十一日、新聞、テレビは心を凍らせるようなニュースを報道した。大阪市で起きた幼児二人の育児放棄事件である。ニュースを知り、私の心は憤りを超え、やるせなさで胸が詰まった。この事件は他の事件とは一線を画す哀れさを感じさせたからである。というのも、これは単に偶発的、衝動的な殺害ではなく、未だ生きる術すべを持たない幼児たちの食を絶つという、最も苦しみを伴う確信的犯行であったからである。

テレビの画面には、公園で遊ぶ二人の笑顔も映し出され、疑いを知らず、時々しか帰って来ない人であっても、幼い二人にとってはこの人がただ一人母親であり、この人を信じこの母を頼るしか方法はなかったのである。母親とは自分の食を抜いても子どもたちに食べさせる。戦前、戦後とそんな母親を見知っている自分には、この行為が直ぐには理解不能な出来事だったのである。

ある日、二人には部屋の外からカチリと錠が掛けられた。その音は二人にとって、母親との今生の別れとなる冷たい音だったのであった。待っても待っても、次の日も次の日もお母さんは戻っては来ない。隣家に出入りする足音に耳を澄ましても、二人の居るアパー

トの鉄製の扉が開くことはなかった。

空腹に耐えかね、一歳の弟は泣きじゃくり、三歳のお姉ちゃんは、せめてもと水を与えようとするが、水もしっかりと止められていたのである。幼い姉弟二人は炎熱の中、密室の中で飢えと渇きの地獄に苦しんでいたのである。どちらが先に絶命したのかは分からないが、お姉ちゃんは弟を抱きかかえるように亡くなっていて、司法解剖の結果、お腹の中には何も無かったと報じられた。これが母の意思とするならば、鬼畜きちくにも劣る悪魔の所業としか思えない。

人は必ず役目を持ってこの世に登場すると云われるが、三年間と一年間、この二人は何を見、何を感じて遠く旅だって逝ったのだろうか。飽食の時代に、餓死とは余りにも悲惨で、実の母親の意図的な行為だけに心が抉られるような戦慄を覚えずにはいられなかった。幼い二人を死に至らしめたのは、人間の尊厳を無視し、命あるものすべてに反逆する身勝手な行為で、どんな弁解も通用するものではない。

この事件に関連して身近な話がある。「あるところに貧しい農家があった。「ある日学校から帰った長女が、今年の学芸会に白鳥の役で出ることを先生に告げられたと、悲しい顔をして云いました。」

長女は自分の家の暮らしでは、白鳥の白い服は手に入らないだろう
とと思っていたのです。誰にも云わず当日は学校を休む決意でした。
発表は翌日に迫りました。長い夜は過ぎ、朝起きてみると真っ白な
ワンピースが枕元に置いてあったのです。それは、母が自分が嫁い
でくる時たった一度だけ身につけた白い肌着だったのです。手縫い
ではあったが、娘にはお姫様の衣装に映りました。家計を思い何も
話さなかった娘、その思いを知り何とか工夫して手に入れた白布を
徹夜で縫い上げた母、二人に言葉は要らなかったのです」これが親
子の情というものであろう。家内は一度だけこのことを私に話した
ことがあった。その母が他界するとき万感の思いで枕辺に長い間佇
んでいたのは長女であった。かつての思いの数々が頭の中を駆け巡
っていたことは多言を要さない。私は母を早く亡くしたが、思い出
にある母は戦後間もない頃、玄関に物乞いや傷痍軍人が無言で立つ
と、ご飯のない頃だったので、味噌とか塩まで分けてやっていた。
特に近所にいた一人の息子を残して戦死した寡婦の子どもには、私
と同様の食べ物を食べさせていた。考えてみると母が家族のために
食事を抜いたのは一度や二度ではなかったに違いない。

昭和二十年代の子どもたちには満腹という言葉も感覚もなかった

が、それぞれの母親に愛情は溢れるほどあった。母親の子を思う心の深さは無限で尽きることはなかったのである。勿論、現代社会でも変わることはないであろうが、人間の生き方や性格は遺伝ではない。日常の親の一つ一つの行動やまごころが子どもを育み育てるのである。つまり、わが子を大切に育てるのは基本であるが、わが子に美味しいものを食べさせ、小奇麗でおしゃれな衣服を着せることだけではない。第三者に対しても同様な愛情を注げるか否かなのである。子どもの眼は純粹なだけに真実を透徹した眼で見ているものである。かつては、子どもは社会全体で育てるものとして定着していた。だが、核家族が進み「向こう三軒両隣り」や共同体が崩れてくると、比較という妬みが覗き見をさせ、豊かさを求めるあまり、最も大切な人間としての運命共同体の優先順位を変化させてしまったのではないか、とさえ思えることもある。豊かさは物にあるのではなく心にあることを失念してはなるまい。

子どものころ「亡くなった人は星になって、また、会えるんだよ」と、教えられたものである。でも、この二人の子どもたちは天国で母に出会っても「おかあさん」と抱きつきはしないであろう。「二つの命」は現代の日本に大きな警鐘を鳴らして逝いったのである。